

28PA-pm251

低リスク手術前の血液検査に影響を及ぼす患者・施設因子の比較：ベイズ流の統計学的手法によるアプローチ

○井出 和希^{1,2}, 米倉 寛¹, 川崎 洋平^{1,3}, 川上 浩司^{1,2} (¹京大院医・薬剤疫学, ²京大・学際センター, ³千葉大病院)

【目的】医療の最適化の観点から低リスク手術前の不要な検査は推奨されない。加えて、Choosing Wisely キャンペーンをはじめとした取り組みにおいても、過剰な術前検査に対し警鐘が鳴らされている。一方、本邦の現状や術前検査に影響を及ぼす因子は十分に明らかでない。そこで、本邦の現状を明らかにし、影響を及ぼす因子の探索・比較を目的にベイズ流の統計学的手法による解析を行った。

【方法】(株)日本医療データセンターより提供されたレセプト情報を用い、2012年4月1日～2016年3月31日までに登録された低リスク手術症例を対象とした。患者因子として、年齢、性別、チャールソン併存疾患指数、処方薬剤、麻酔種別、入院・外来区分の情報を、施設因子として施設規模(100床未満、以上)等の情報を考慮した。解析にあたっては、Bayesian generalized linear mixed mode (Bayesian GLMM) を用いて各因子の影響を探索的に検討・比較した。

【結果】69,252症例(9,922施設)が解析対象となった。平均年齢(標準偏差)は44.3(11.3)歳であり、57%が女性であった。また、0.5%の症例で抗凝固薬の処方が認められた。解析対象症例のうち、40.6%が100床以上の医療機関で行われた。Bayesian GLMMによる解析の結果、抗凝固薬の処方(OR [95% HPD interval], 3.57 [2.22 to 5.61])や麻酔種別(全身麻酔)(5.42 [4.85 to 6.03])の寄与が大きい一方で、施設規模の影響も示唆された(2.64 [2.53 to 2.75])。

【考察】低リスク手術前の血液検査について、患者因子に加え、施設因子が影響を及ぼしていることが示唆された。抗凝固薬の処方や麻酔種別のORより、薬剤等に基づき必要性が考慮されていると推察されるものの、施設因子の影響も大きい。今後、定常的な検査の影響等について更なる検討が必要であると考えられた。